

佐々木一也 SASAKI Kazuya

聞き手: 福嶋亮大

教養教育をめぐる環境の変化

福嶋 今日では佐々木先生のご退職を前にして、記念のインタビューをさせていただくことになりました。先生の大きな関心として、一方にハンス＝ゲオルク・ガダマーを中心とした哲学研究があり、他方で大学における教育の問題について現場の先頭に立って取り組んでこられたということがありますね。

まず後者から伺っていきたいのですが、先生が立教大学に来た当時と現在を比べて、大学や学生の雰囲気は変わりましたか。

佐々木 私が立教大学に着任したのは1989年ですから、今年で31年目になります。当初は一般教育部に所属しており、95年に文学部に移籍しました。ですから文学部に限らずいろいろな学部の学生と接していたのですが、当時、バブル経済もまだ華やかかなりし頃の大学生というのは、これは立教に限らず、「大学生なのだから知的に成長しよう」という文化がまだあったように思います。それから間もなくバブルが崩壊して、世の中が全体的に貧しくなっていくと、若い人の関心が知的なことよりも自分の食い扶持を得ることに向くようになってしまったという変化はあると思います。

福嶋 日本では1991年に当時の文部省による大学設置基準の大綱化があり、大学の環境は大きく変わりました。先生の立教での教育経験は、大学の仕組みの変化と併走していたわけですね。このおよそ30年間の大学のシステムの変質と学生のマインドの変質はつながっているとお考えでしょうか。

佐々木 80年代には既に日本の大学全体で教養という概念がかなり揺らいでいて、それが91年の大学設置基準の大綱化につながったわけですが、結果として教養教育が表立ってなくなることで、

そういうものは必要ないのだという感覚が大学人の中に広がってしまったと思います。学生も「パンキョウ」といった蔑称を使って「楽勝科目を集めて単位さえとればいいのだ」というような受け取り方をするようになり、教養教育が名実ともになくなってしまった。そうした中で各学部は自分の学生と1年生の時から向き合うという目標を掲げたわけですが、専門的知識を早く身につけさせようとする姿勢で学生に向き合うようになったのです。ところが実際の学生たちは本当にピンポイントでしか受験勉強をせず、塾や予備校でもピンポイントで点をとる技術を教えたりしたものですから、小手先の技術ではない知的な体力が十分養われていないのです。それに加えて大学も「専門だけやっていたらいいよ」と言うものだから、本当に狭い範囲内でしか積み上げをしていない学生が育つ。横の分野にはほとんど関心がないし、わからないことは専門家に任せればいい、という気風が育ってしまったように思います。

福嶋 今の学生は総じて見切りが早くなっている。大学院生も自分のフィールドはここからここまで、それ以外のことには無知というケースが多い。しかし、それでは異種交配が起きませんからね。

佐々木 それは大学文化を根幹から揺るがしてしまいます。

教養の衰退がもたらすもの

福嶋 そうすると、91年以降の改革は教育的な視点から見ると失敗だとお考えですか。

佐々木 そうですね。途中から財界も文科省も『「教養教育は要らない』とは言っていない』といったメッセージを盛んに出すようになります。中教審の答申などでも「教養は重要だ」といった文言が入ったりするのですが、大学人の自己規定が「教養人」ではなく「専門人」になって、教員からも教養のたがが外れてしまった。しかも、大学教員の間での評価は専門性でしかなされないわけですから。

福嶋 教員もますますタコツボ化していく……。

佐々木 そうした傾向は顕著だと思います。70年代には学際的、融合的であるによって新たな文化をつくっていくといったことが盛んに言われ、例えば万博をやった頃はそうしたことを標榜する「未

来学」などというものもあったわけです。

福嶋 林雄二郎や小松左京ですね。

佐々木 そうです。そうしたものも影響力を失ってしまった。

福嶋 未来つまり未規定なものについて大風呂敷を広げることはできなくなり、すでにあるものを追認する思考になっていく。

佐々木 大風呂敷はダメで、学問というのは細かくきっちりと詰めていく専門性が大事だという考え方が支配的になる。そうすると良くも悪くも研究者が小粒化していく。そういう流れの中で学生も「自分は小粒でいい」と思ってしまう。

福嶋 そもそも教養というのは、ガダマー的に言えば、自己修正を通じて認識の地平を拡大していくこと、あるいは自分と他人の間の互換性を増すことによって自己を対話的に構築するプロセスのことですね。だから、知識や情報をため込むだけでは教養にならない。教養は自己の成長や建設、つまりドイツ語でいうBildung（ビルドゥング）と不可分に結びついている。そういう意味での教養の概念が死滅していったのが、この30年ぐらいの大きな流れでしょう。

佐々木 そういうことですね。その結果、学生たちは自分を客観視することができなくなりつつある。自分の好みや趣味、自分らしさ、本当の自分、そういったものばかり追求していくのだけれども、そんなものは玉ねぎと一緒にいくらむいたって何も出てこない。自分というのはいろいろな他者との間でどういう位置取りをしていくかを通じてやっと自覚されるものです。ところが教養に関心がないものだから、異他的なものに対して対処していく訓練がほとんどなされていない。だから、自分を見直す機会もない。当然、変わることもできない。それぞれが独善的な自己中心主義を貫いて、衝突が起きたらその相手を排除することの繰り返しで、どんどん自分の世界を狭めていく。それで「寂しい」と言っていたりするわけです。

全学共通カリキュラムの創設と普及運動

福嶋 佐々木先生は立教大学の一般教養課程である全学共通カリキュラム（以下、全カリ）にもずっと関わってこられました。今から振り返るとどういう意味を持っていたと思いますか。

佐々木 全カリは1991年の立ち上げ時からずっと専門委員としてカリキュラムをゼロからつくる仕事をしてきて、2000年代に入っても全カリの運営には一貫してかかわり、自分でも必ず1科目は講義を担当してきました。2014年度から18年度まで部長を務めました。全カリはさきほど言ったような意味での大学教育の根幹を担う部分だと思っていて、そのプログラムを強化して学内に定着させることに意義を感じてやってきました。

91年の大綱化によって一般教育課程の法的根拠がなくなり、教養教育を担う組織も要らないということになりました。そこで教養課程を廃止して専門課程の充実に走った大学が多かった中で、立教は違っていました。立教の各学部の指導的な教員たちには、必ずしも教養課程をないがしろにしてよいとは思っていない人が多かったのです。むしろ、従来の一般教育部に丸投げするのをやめて、学部の自分たちが教養教育をやるという姿勢を示した教員たちがいたので。それは後に学部長や総長のような幹部として立教大学を担っていく方々でした。そのような志や考え方を持った有志教員が協議して、全学に共通する新しい教養教育システムをつくることを目指してできたのが全カリでした。

国立大学では教養教育の分野ではよく委員会方式がとられるのですが、それは主体性も責任のありかも明らかではない組織になってしまいます。委員長も委員も他の委員会同様任期の間だけの仕事と割り切り、任期が終われば無関係になり、また新しい委員に自動的に交代してしまう。立教ではそうでなく、一般教育部のような固定的組織でないものの全カリの代表者である全カリ部長に学部長と同じ権限を与え、学部長とまったく同格で大学の重要政策に参画してもらい、当初は保健体育（現在のスポーツ）や英語などの外国語に関しては人事権も持っていました。あるいは、歴史や経済といった科目を全カリ独自のコンセプトで設置したいという場合には、その専門に近い学部に所属させながら全カリが主体となって人事を行うこともありました。だから、そこに集う学部教員たちにはかなり自覚と責任意識が生まれ、結果として主体性を持った実体のある運営組織が実現したのです。

その当時50代を中心とした全カリのコアとなる学部教員たちが話し合ってそういう方向を決めていきました。私はまだ30代半ば

過ぎの若手教員で生意気なことを言っていたので、そういう人たちに雇われてその中身をつくれと言われたのです。

そこで、どういう科目が必要なのかといった科目表をつくったりするのはもちろん、講義で扱うテーマや狙いがかかるような講義名をつけるということもしました。

福嶋 「哲学への扉」とかですね。

佐々木 そうです。それ以前は「哲学」「数学」「倫理学」とかとかく同じ名前の科目がたくさん並んで、例えば「哲学」という名前の講義が20科目もあったりしました。今のような細かいシラバスはなく、履修要綱にも数行のざっくりとした説明しかないわけですが、そうすると何が起るかということ、学生が単位のとりやすいと言われる科目に集中するようになっていたのです。ある先生のところには1000人単位で学生が集まる一方、他の先生のところには数十人しか来ないといった、極端な偏りが起きていた。そういうことをやめてもっと実質的に勉強させるために、学生の関心に即して講義に名前をつけるということもしました。それから、1、2年生だけを対象にするのではなく、各学部の専門で少し勉強したことを応用したらどうなるのかという関心に対応するコンセプトの3、4年生向け科目もたくさん設置しました。そういった仕組みをつくり、学生にも教員にもことあるごとにその理念を伝えてきたので、自分に与えられた場所で、全カリ普及運動を自分なりに十分やってきたという自覚はあります。

福嶋 全カリは講義が中心ですが、それについてはどのようにお考えですか。例えば、カール・ヤスパースは大学の中心は講義だと言っています（福井一光訳『大学の理念』、理想社、1999年）。当時から講義は一方的で学生が受身になってしまうからよくないと言われていた。しかし、講義においてこそ教員の持っている知識が人格や声とともに伝えられるのであって、それをおざなりにすることはできない、と。結局、情報が与えられるだけでは、人間は本当の意味で考えるという次元にたどり着かないんですね。現在では講義の評判はもっと悪くなっていて、学生から能動的にアクションし、教員が受けとめるというインタラクションが要求されるようになっていますが、やはり大学の大学たるゆえんは、顔を備えた講義にあると思います。

佐々木 おっしゃるように全カ力は講義が中心です。ドイツにおける講義の位置付けについては少し後でお話したいと思いますが、現場で取り組んだのは、授業評価アンケートの導入です。学生が講義をどう受けとめたのか、レポートや答案だけでは汲みとれない部分をフォローするためのものです。これは国の方針でもあったのですが、「どうせやるのならちゃんとやろう」ということで、学生による授業評価アンケートの中身をつくったのは実は私なのです。アンケートを作成する全学ワーキンググループの座長に指名されて、いろいろな抵抗や反感を乗り越えて、今行われている制度をつくりました。

福嶋 そうなんですか。アンケートはいつ始まったのでしょうか。

佐々木 2000年代に入ってすぐなので、もう20年近く続いています。立教ではアンケートを始めた当初から所見表とって教員の側からも学生からのアンケートへの返事、言い訳を書くようになっていますが、あれも私がつくったものです。そういうことをして全カ力を実質化させよう、中身のあるものにしようと思ってきたのですが、時間が経つと形骸化していく側面はどうしてもあるとは思っています。

福嶋 当初の理念を持続させていくのは、どんな分野でも難しいことですね。研究にしても学問的情熱を持続させるのは難しい。当初の好奇心は大学に就職すると消えてしまって、いかに競争的資金を獲得するかというたぐいの俗っぽい話ばかりになることは往々にしてある。今の大学では教員のモチベーションの引き出し方がかなり下品になっている。そのことが大学の荒廃を招いている気がします。

佐々木 科研費の金額や件数を対外的に示すことで大学あるいは研究者としての威信を示す、みたいなことになっているのやはり問題です。科研費を獲得しやすいテーマや研究、あるいは手法というのは明らかであって、それはその時代の主流の研究に沿っているものなのです。「萌芽的」といった分野もあるにはあり、私もその分野で科研費をもらったことはありますが、あまりにもいろいろな制約があって使いにくいので、一度もらって以来、応募したことはありません。自覚的に応募しませんでした。お金をもらえるように研究を組み立てていく必要があるので、むしろ研究を抑圧してしまう側

面もあるんですね。

マールブルクの哲学者

福嶋 哲学の話に移りましょう。佐々木先生の専門であるガダマーの自伝（ハンス・ゲオルグ・ガダマー、中村志朗訳『ガダマー自伝——哲学修業時代』未来社、1996年）を読むと、彼がマールブルクの知的空間に深く根ざした哲学者であることがわかります。ガダマーは「対話」を基本的な理念としましたが、それはおそらく抽象的な話ではなく、実際にマールブルクでカール・レーヴィットやマルティン・ハイデガー、パウル・ナトルプといった思想家たちとの交流の中で自己形成してきたことが大きい。友愛や尊敬に満ちた対話が哲学のベースになる。その理想的な現実が1900年生まれのガダマーの世代を支えたのではないのでしょうか。

佐々木 ガダマーはもともと大学教授の息子で、そこがハイデガーとは大きく異なるところです。ハイデガーが学問のない教会の下働きの息子だったのに対して、ガダマーの父親は今で言う創業科学と呼ばれる分野の研究者で、マールブルク大学に勤めていたのですが、正教授としての地位をブレスラウという町の大学に得ることになった。それでブレスラウに引っ越して、ガダマーは中学高校時代をブレスラウで過ごしています。

ブレスラウは現在はポーランド領で、名前もヴロツワフと呼ばれています。これはスラブ人が住んでいた地域に中世からゲルマン人が進出してドイツから東方領土と呼ばれたところで、ドイツの町として発展したのですが、第二次世界大戦後に設定されたオーデル・ナイセ線で切られて現在はポーランドの一部になっています。本来ポーランドだった東の部分がソ連の領土になり、ドイツだったところがポーランドになるという構図で、もともとポーランドだったところは現在はベラルーシになっていますね。

福嶋 一口にドイツの哲学者と言っても、その内実はかなり多様です。例えばカントの生まれたケーニヒスベルクにしても、てっきりドイツの真ん中あたりにあるのかと思い込んでいたら、今言うリトアニアとポーランドに挟まれたロシアの飛び地で、海に面した

土地なんですね。

佐々木 ケーニヒスベルクはロシアではカーニングラードと言って、軍港の町です。ソ連時代には、日本人の研究者がカントのお墓参りをしたいと思っても、軍港の町だから外国人は入れてもらえなかったそうです。

福嶋 カントは生涯のほとんどをケーニヒスベルクで過ごしたわけですが、実際は港町なのでいろんな情報が入ってきたわけですね。

佐々木 そうです。プロイセンの副首都だった大きな町で、情報は何でも入ってきたと思います。

福嶋 ガダマーも政治的・軍事的に一筋縄ではいかない境界の世界を生きていた。ハイデガーが農民的なところをもつものに対して、ガダマーは都市的な哲学者ということになるでしょうか。

佐々木 そう、都市的で、とても社交的な人です。これには理系の父親の影響があるのではないかと思います。理系は共同研究をするので、研究者仲間で一緒にやっているのを見て育ってきたわけですから。

父親は息子も理系へ進むのを期待していたそうです。ガダマーはそれには反発してブレスラウ大学の人文系へ行くのですが、マールブルク大学の教授になった父とともにマールブルクへ戻ってくる。マールブルク大学の哲学は新カント派の牙城で、マールブルク学派といってヘルマン・コーエンといった著名な論理学者なんかが中心的な存在でした。それに対して、もっと価値哲学的な倫理学が中心を担ったのは西南ドイツ派といってハイデルベルクを拠点にしました。ガダマーがマールブルクへ戻ったのは、たまたま父親が故郷に錦を飾るかたちでマールブルクの教授になったからで、積極的な理由があったわけではないのです。けれどもそこで、当時有名だったニコライ・ハルトマンをはじめマールブルクにいた新カント派の大物たちから直接教わるという幸運が訪れる。そこに、ハイデガーが最初に得た教職の場としてやって来るのです。

ハイデガーとガダマー

佐々木 よく知られているように、ハイデガーは貧しい家の出身です。ブルデューではありませんが、ヨーロッパというのは文化的再生産が家庭の中で行われるという古い仕組みが残っているところではあります。その点、ハイデガーの父親は教会で墓を掘ったり棺桶をつくらせたりという下働きをする寺男みたいな人でしたから、学歴も教養もないのです。その息子が大学教授になるというのは、ドイツでは普通はまずあり得ないことです。

けれども、ハイデガー少年はものすごく優秀だったので、神父さんがその才能を惜しんで教会から奨学金をもらえるようにして、コンスタンツのギムナジウム、そしてフライブルクの大学へ行かせてもらったのです。聖職者になるための奨学金をもらったので最初はカトリック神学を勉強したのですが、途中で哲学に変わってしまう。

福嶋 ハイデガーにはフリッツという弟がいますね。最近、『マルティンとフリッツ・ハイデッガー：哲学とカーニヴァル』（ハンス・ディーター・ツィンマーマン、平野嘉彦訳、平凡社、2015年）という本を読んだのですが、フリッツ・ハイデガーは朴訥ではあったがユニークな言語能力を備えていて、カーニヴァル的な性格の持ち主でもあった。だから、村の祭りがあればとても重宝されるとともに、ナチスが台頭してくるとそれを茶化すようなことを言っていたらしい。ハンナ・アーレントもマルティンへの手紙で「あなたの弟のフリッツは非常にいい文章を書く人だ」と言っていたりする。兄のマルティンはヘルダーリンを介してドイツ語からギリシャ語へというようにヨーロッパ文明の本筋をさかのぼっていくわけですが、その皮を一枚剥けば村祭りの世界が現れるということがフリッツの存在からもわかるんですね。

佐々木 そういう人とガダマーというのは、肌が合わないというのはあったのではないかとは思いますが。とはいえ、ガダマーはマルブルクに来る前から、ハイデガーの講義を聴きに行っていたようですね。ガダマーに限らず他にも多くの学生が、他所の大学からハイデガーの講義を聞きに来ていたそうなのですが。

福嶋 さっき言った『自伝』には、ガダマーとハイデガーのやり

とりについてもエピソードが紹介されています。たとえばニシンが死ぬかどうかで、ハイデガーとその知人たちが盛り上がった。ハイデガーによれば動物は死なない、ただ衰弱するだけでsterbenではないというわけです。これはさりげないけれども、人間と動物を峻別するハイデガーの危ういところをよく示しているのではないか。あるいはハイデガーのケーレ（転回）という概念は、一般には神学的な改心や転向のように捉えられているけれども、そうではなく、山を登って途中で折り返すことがケーレである。何度も折り返しながらだんだん山を登っていくのがハイデガーの哲学だ、とガダマーは言うわけです。このあたりは身近にいた人ならではの面白い読み方だと思いますね。

対話の哲学者、ガダマー

佐々木 ハイデガーは話がうまくて、やはりカリスマ的なものがあつたみたいですから、その語り口に学生たちは引き込まれていったそうです。そういうハイデガーと比べると、ガダマーはもうちょっと真面目な学者でなかなか芽が出なかった。ちゃんと講義ができるようになったのは40歳くらいの時です。ドイツではやはり講義が大事で、講義というのは、ちゃんと博士学位をとって、教授資格をとってというプロセスを経ないとできないのです。少人数による演習授業は、教授資格がなくても、場合によっては博士学位がない人でも、要するに教授が認めればできるのですけれどね。それくらい講義は重要だとされています。

ガダマーは20代の終わり頃に教授資格をとったものの、出席する学生から直接わずかな謝礼をもらって講義する「私講師」というポジションからなかなか出られなかったのです。ハイデガーにも「きみは哲学に向いていないね」みたいなことを言われたりして、プラトン哲学をはじめギリシャ古典の研究にしばらく没頭していたりしました。芽が出るのは40歳ぐらいで、運良くライプツィヒ大学の正教授に採用されたのです。まだ戦争中、ナチスの時代です。だいたい哲学というのはイデオロギーにかかわるからその時代の支配的な政治勢力の影響下に置かれてしまうのですが、ライプツィヒは

なぜかそうではなく、ナチス色が濃い人はあまり好まれなかったんです。ハイデガーがナチスに傾いていく中で、ガダマーはハイデガーの弟子だったにもかかわらず、その時代にはハイデガーから少し距離を置いていたということもあり、色がないということで、ライプツィヒで正教授の職を得ることができた。そこから本格的に哲学者としての活動を始めるんです。

彼の資質として、フレンドリーで、人とやりとりするのが得意だから、対話するわけです。戦後は、ライプツィヒは東ドイツですからソ連の現地の指導者に見込まれて学長にされてしまう。それから共産党の人たちや、ヒトラーユーゲントに取って代わった共産主義青年同盟みたいなものの学生たちとのやりとりでもずいぶん苦労したそうです。まだ壁ができる前だったのでフランクフルトに転出するチャンスがあり、そこでライプツィヒを飛び出して西側に移り、最終的にハイデルベルク大学に呼ばれて、そのまま晩年まで過ごすことになる。ハイデルベルクの前任者はヤスパースです。

福嶋 なるほど。対話は生存の技術でもあったんでしょうね。

佐々木 よく知られているようにヤスパースの奥さんはユダヤ人で、ナチス時代には講義を禁止され、ほとんど軟禁状態でした。そこで中立を掲げるスイスのバーゼルに呼ばれたのですが、結局ドイツを脱出できなかった。ようやく戦後にバーゼルに移れるようになった時に、その後釜としてガダマーがハイデルベルクにやってくる。そこで、コミュニケーションが得意なガダマーは、ある種の自分のシューレをつくってしまうのですね。

私も恥ずかしながら、晩年のガダマーに会ったことがあります。ガダマーは1900年に生まれて2002年に亡くなっているので、長生きしているでしょう。ガダマーの現役時代のドイツの大学の正教授は、60代の半ばになると授業はやらなくてもよくなるのです。いわゆる名誉教授になるのですが、日本では名誉教授は授業ができないけれど、昔のドイツでは名誉教授は授業をしてもいいし、しなくてもいいんです。しかも年金ではなく、満額の給料が終身で払われる。

福嶋 それはユートピアですね(笑)。

佐々木 それが正教授です。正教授というのは講座の主任で、正ではない教授は年金生活です。ガダマーは正教授だったので正規の給料をもらえて、研究室もあって、ずっと授業もやっていた。それ

から、アメリカでもずいぶん活動したので、彼の解釈学はアメリカで一番読まれているかもしれません。ドイツでももちろん哲学界の重鎮ですが、アメリカでもずいぶん普及しています。

福嶋 先生の訳されたジョージア・ウォンキーは『ガダマーの世界——解釈学の射程』（佐々木一也訳、紀伊國屋書店、2000年）で、ガダマーをリチャード・ローティと結びつけていますね。解釈学はアメリカのプラグマティズムと交差するところがあったということでしょうか。

佐々木 相性は悪くないと思います。そんなことで、アメリカ人の弟子たちがハイデルベルクに来て、国際的なガダマーを囲む解釈学哲学会のような研究会を毎年開催していたんです。私もそれに3回ほど参加して、そのうちの1回は発表もさせてもらって、ガダマーと直接、話をさせていただく機会がありました。発表者は、親しい弟子たちがガダマーの自宅近くのレストランで開くパーティーに招いてもらえるので、そこでいろいろなお話をさせていただきました。

福嶋 どんな印象を持たれましたか。

佐々木 すごく親切で、愛想のいい人でしたね。

福嶋 やはり一貫して対話の人なんですね。

佐々木 ああいうタイプの人だからできる思想なのだと思います。ただ、ガダマーの考え方のなかでひとつ、我々にとってはちょっとどうかと思うところがあります。実は、ガダマーは何回も日本へ来るように依頼を受けたのですが、亡くなるまで一度も来なかったのです。その理由は彼にとってははっきりしていて、まったく異なる伝統に根を持っている文化同士はコミュニケーションが難しく、自分が日本へ行っても日本に貢献できることはほとんどない、と言うのですね。日本で珍しいものを見たり聞いたりすることはできて、それが直接、自分の哲学に寄与するのは難しいのではないかと。そういうこともあって、アジアには来なかった。

「存在」と「伝統」

福嶋 ガダマーのライバルにジャック・デリダがありますが、この

両者は似ていなくもない。つまり、デリダの脱構築の対象はもっぱらヨーロッパの古典的文献なので、彼も結局はヨーロッパ中心主義者じゃないかという批判は以前からある。ガダマーはガダマーで同じようなことを言われていたりするわけですね。ただ、アルジェリア生まれのユダヤ人のデリダは腰が軽いというか、日本にもよく来ているし、そういう行動によって脱構築や散種を実践していたところもある。他方でガダマーの場合は居住まいを崩していくという感じはなく、文化的な伝統はの中で完結したものだという姿勢を保ち続けてきたわけですね。

佐々木 ガダマーの有名な「地平融合」という概念は厳密に言うと、過去の地平との融合を理論化しているものなのです。でも、現在とはまったく生活習慣も考え方も違うのに、どうして過去のことかわかるのか。それはやはり、次々と過去から受け継がれてきたものの一部を使いながら変わってきたという流れがあって、その末裔であるから、ということです。

福嶋 デリダの場合はエクリチュール、つまり書かれたものの伝承が大きなテーマだと思うのですが、ガダマーの場合、書かれたものと話されたものの間の区別は、そこまで厳密にはしていないということでしょうか。

佐々木 そうですね、していない。

福嶋 そうすると、過去との対話というのはテキストでなくてもいいということになるのでしょうか。

佐々木 ただ、実際にはテキストでしかできないわけです。デリダの場合は、テキストと言っても、テキストを読む段階でもう話し言葉に化けてしまうということがあり得るじゃないですか。ガダマーの場合には、そのエクリチュールを可能にしている *archi-écriture* (原エクリチュール) との関係で、エクリチュールを重視しているのではないかと思います。*archi-écriture* というのは、ハイデガーの言う存在に近いものがあるのではないかと。

福嶋 そうですね。デリダの場合は原エクリチュールといっても実体的なものではなく、むしろそこには差異と遅延しかない。そうやって神学の罫をすり抜けようとする。しかし、ハイデガーの場合はどうか。例えばジョージ・スタイナーは、ハイデガーは確かに神学を批判したけれども、結局彼の言う *Sein* (存在) は実質的には「神」

と置き換え可能ではないかと言っています（生松敏三訳『マルティン・ハイデガー』岩波現代文庫、2000年）。そのあたりはどう思われますか。

佐々木 そういう理解をしてしまうとハイデガーの哲学的努力が全く生かされなくなってしまうので、身も蓋もないんですよ。

福嶋 しかし、ガダマーの場合はあまりそういう神がかった感じはないというか、よりプラグマティックな印象を受けます。

佐々木 ガダマーは、ハイデガーが陥った、晦渋で、間接的な表現はできる限り用いずに、できる限り普通の論理性を持った言葉で表現するわけです。そのように努めているところが健全だと思います。

福嶋 なるほど。ハイデガーの言う「存在」とガダマーの言う「伝統」というのは、ある程度近いものなののでしょうか。

佐々木 伝統の中には、その存在が含まれているのだと思います。伝統と言うといろいろなイメージがありますが、伝統の本質は何かと言われたら、それはちょっとわからないですよ。ハイデガーはそれを自分の哲学の概念でそのままストレートに「存在」と表現しているのですが、ガダマーはもう少し具体的なイメージを絡めて表現しようとしている。それだけに、ガダマーのほうが方法論的な展開があり得るのに対して、ハイデガーは本質的な概念を直観的に指定してしまっているので、展開のしようがない。

福嶋 確かにカルト的にならざるを得ないところがありますね。

佐々木 そうです。だから、ハイデガーにはちゃんとした思想の後継者はいなくて、彼の哲学に寄り添って考えようとする人々はみな亜流になってしまって、ハイデガーの使った用語をそのまま使って、ハイデガーが言ったように言うしかなくなってしまう。

福嶋 だからフランスでは、フーコーでもデリタでも、ハイデガーを借りつつ全く別の方向に展開していったということなのでしょうね。

佐々木 ハイデガーに触発されて展開していった、というようなかたちですよ。

福嶋 少し角度を変えますと、ハイデガーの『ヒューマニズム書簡』では、人間というのは存在の主人ではなく「存在の牧人」であるという言い方がされています。存在そのものではなくて、その傍らで存在をケアしているのが人間である、と。ガダマーの場合、人

間は「伝統の主人」にはなれるのでしょうか。

佐々木 なれないと思います。

福嶋 となると、やはり「伝統の牧人」というか、その全体を捉えきれない「伝統」を横で見ているという感じなのでしょう。

佐々木 横で見ているというか、それを引き受けているということですね。引き受けて生きざるを得ない。そうすることによって自分の主体性の限界を自覚し、間接的にその存在の機能みたいなものを、具体的な歴史やさまざまな展開の中に表現しているのではないかと考えています。

啓蒙主義と科学の限界を乗り越えるために

福嶋 ガダマーのモチーフのひとつに、啓蒙主義や実証主義への批判があります。啓蒙主義はあらゆる先入観を排除して、まっさらな状態で認識を組み立てていくと言うわけですが、ガダマーの場合は、人間は必ず先入観の中にいるのであって、その中で判断していくしかない、ということになる。啓蒙主義や実証主義には限界がある、というのは佐々木先生自身の哲学観とも合致するのでしょうか。

佐々木 ええ、私はまったくそのように思っています。例えば、自然科学が考えているのもひとつの世界観なんですよ。

福嶋 ある「先行判断」がつくり出した世界観である、と。

佐々木 そうです。例えば、ニュートンの物理学で重力という概念がありますが、重力というのは一体何かといえば、形而上学的概念ですよ。重力とは質量のあるもの同士が引き合う力のことである、などと言われていると思いますが、直接触れないで力を及ぼすというのは念力みたいなものです。電気磁場もそうですが、その正体はわからなくて、ブラックボックスなんです。それをブラックボックスにしたまま公理にすると、こういう世界観が組まれますということを示しているに過ぎない。それがたまたま科学技術などを介して目に見える形で仮説が実証されるようなことがあるから、すべてが正しいのだろうと素人は思うけれども、その実証されたものはそのように実証されているだけで、そこから一事をもって万事というのは乱暴な論理です。科学技術が研究者の実験室の中で行われている

限りは問題ないわけですが、社会化されて素人が使うことによって、科学が予想できなかった結果をたくさん生むことが当たり前になってしまっている。

それにもかかわらず、科学技術に対する信頼が失われないのはなぜかと言えば、経済性があるからですよ。みんなが「これはまずい」と思っているのに、お金の儲けのシステムの一部に組み込まれているから止められなくなっている。同じ科学の中でも、地球の温暖化は人間の活動の結果だという説もあれば、関係ないという説もあるわけです。そういう大きな問題については、科学だって結論は出せないんです。

福嶋 例えば、重力の起源だって、いまだに解明できていませんからね。だから、ブラックボックスにしている部分が今でも非常にたくさんあるのに、それが無謬であるように人間はつつい錯覚してしまう。しかし科学というのは常に反証可能性へと開かれていなければいけないわけですから、無謬性を装うのではむしろ宗教と変わらない。それでは本当の意味で科学的とは言えないと思いますね。

実体的文明活動と非実体的文明活動

福嶋 ところで、今おっしゃったようなことは、本紀要の19号に掲載された「実体的文明活動と非実体的文明活動の間」という論文ともつながります。僕が論文を拝読して思い出したのは、晩年のフッサールが書いた『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』です。

フッサールはガリレオ・ガリレイ以来、自然を徹底して数学化していく流れが生じ、それが行き着くところまで行って20世紀まで来たけれども、結果としてそれが生活世界を隠蔽してしまったことを問題にしている。ガリレオは一面からすると「発明者」なんだけれども、他面からすると「隠蔽者」であって、その両方を見なければいけないわけです。佐々木先生のおっしゃる「実体的文明活動」は生活世界の営みであり、「非実体的文明活動」はガリレオ的な自然の数学化の営みと言い換えられると思います。20世紀の哲学の問題を引き受け、それをまた別の形で展開する。それもやはりガダマー的な実証主義批判とリンクするところがあります。

佐々木 まったくその通りです。例えば、林みどり先生がよく言及されるジョルジョ・アガンベンは、生政治、ゾーエーとビオスの区別を話題にしているように、我々の時代では理論と、現実の肉体的なものを含んだ生の生活が乖離しているんですね。それがいろんなところで悪い事象を引き起こしてしまっている。政治はもちろん科学技術でも、日常生活のほんのささいな一コマコマに、そういう乖離の結果である齟齬が生じている。それが人の精神を危うくし、不安を生み、うつ病みたいなものをたくさん生んでいる。これだけ世の中が豊かになって生活に困らないのに、なぜうつ病になるのか、何が不満でそうなるのか。江戸時代の人がタイムワープしてここへ来たら、「おまえら何を贅沢言っているんだ」と言うでしょう。

福嶋 「衣食足りて礼節を知る」という観念から言えばそうなりますね。

佐々木 科学技術で衣食足りても決して礼節は生まれないことを科学技術は予測できなかったということです。

福嶋 技術の進化がどこで最も深刻に問われるかということ、やはり生命倫理ではないでしょうか。例えば、遺伝子操作をどこまで許容するか、あるいは出生前診断をどこまで推進してよいか、というたぐいの問題です。実体的なものとは非実体的なもの、身体と技術がいちばんシリアスに衝突するのが生命倫理の分野だとして、しかし今は計算可能性や操作可能性をどんどん増していけばいいという話のほうがお金を獲得しやすくなっているし、産業とも結びついてブレーキが利きづらくなっている。

佐々木 現在、哲学が社会的に果たすべき役割のひとつは、そこにどうやってブレーキをかけるかということだと思います。今、人が使っているさまざまなシステムは、むしろブレーキを壊すようなものが多い。そのシステムと人間の生活との関係を明らかにし、どこをどう調整してバランスをとっていくのかを示せるのは、やはり哲学なのではないかと思っています。

福嶋 結局、計算力が上がってくると、これまでは操作不可能だったものが操作可能になり、その結果として人間は新たな選択を突きつけられるわけですが、その時の選択の支えになる基準がない。もう原理的には遺伝子操作でも何でもできてしまうんだけど、そこで本質的な歯止めになるものは何もなく、議論も成熟しないう

ちに、テクノロジーだけが進化していくんですね。

佐々木 議論が成熟していないというか、生命倫理のような問題はそもそも議論によって何か決定的な真実が見えてくるといった性質のものかどうかははっきりしないと思います。実際に結果として犠牲を出してみても、この犠牲は受け入れられるが、この犠牲は受け入れられない、というようなところから判断していかなければ、最終的には決まらないものなのかもしれません。

福嶋 一度痛い目を見ないとわからない……。

佐々木 痛い目を見ないために理論があるわけです。あらかじめシミュレーションして、被害を未然に防ぐんだけど、そのことが実は人の生の生活を損ねてきた可能性もあると思うんです。森岡正博さんの「無痛文明」(『無痛文明論』トランスビュー、2003年)という考え方に私はとても共鳴しています。とにかく痛みをなくすように動いてきた文明に対する警鐘です。その問題を解決していくために、やはりこの論文で書いたようなことを考えていかなければいけないと思っています。

西洋哲学と日本哲学の融合という課題

福嶋 佐々木先生は以前からヴィルヘルム・ディルタイからガダマーに至る解釈学の伝統に沿いながら「生」をキーワードにされています。つまり、単純な計算力によっては支配されない領域から思想を立ち上げようとしてこられた。その問題意識とも交差する形で、90年代以降は日本の哲学と西洋の哲学という「地平の融合」の難しい二つの領域を、どう結ぶかということテーマとしたわけですね。今、この問題についてはどういう展開があるとお考えでしょうか。

佐々木 日本哲学というのが、私の最終的な目的です。我々は西洋人ではないわけですから、西洋の哲学をそのまま我々が知ったところで現実の生活とどう関係していくのか、どう使われていくのかは非常に危うい。我々が自分で考えて自分の世界観を構築し、自分たちの今抱えている問題に対して自分たちで解決策、方向性を見出していけるようにならなければいけないのだから、日本哲学が最終的な目標なのです。ただ、さしあたって今の私たちは江戸時代より

前の儒教や仏教の思想で考えても、その答えが見つからない状況にありますよね。なぜなら、現在の私たちの生活のほとんどの要素は西洋の近代文明が由来のものだからです。ただ、西洋の近代文明をそのまま使っているわけでもない。技術そのものはそうであっても、その技術を使って物をつくるというところでは、やはり西洋と同じものはつくりません。日本人にしかできないものや、日本人の特徴というのはやはりあって、それが西洋人や他の地域の人たちから高く評価されるということもあつたりする。

福嶋 文化的な「翻訳」の深さの問題ですね。

佐々木 完全に翻訳してしまうと日本語になってしまうから、外国にも売れなくなってしまう。

福嶋 西田幾多郎は典型的にそうだと思いますが、西洋の概念を強引に日本語のシステムの中に翻訳して、哲学をつくってきた歴史がある。それも広い意味では「地平融合」ではあるでしょうね。佐々木先生としては、そういう哲学史を踏まえつつ、日本からどういう哲学を組み立てていくべきとお考えでしょうか。

佐々木 私が強調したいのは、西洋のものを使いながら、「どこか違うな」という違和感を大事にしていくことです。その違和感を大事にしながら、どちらかに偏ってしまうと片方を排除することになってしまうから、両方に足を置くためにどこでバランスをとるのかを考えていますね。

「存在」と「無」の間へ

佐々木 そうした時に参考になるのが、京都学派の「無」という概念です。「無」という概念は、西洋では「存在」の否定という形で間接的に表現される、論理的概念としてあります。しかし、日本では、少なくとも言葉としては「『ある』の否定」という形はしておらず、独立した言葉です。だから「無」を主語としたような、実体化したような使い方もある。実際の生活の中でも、「間合い」や「空白」といったものを上手に使う文化がありますよね。あえてそこに実体的な存在者を置かないことで、逆に存在感を上手く醸し出す。西洋にはなかなかそういう文化はありません。

福嶋 「床の間」とか「人と人との間」といった概念ですね。

佐々木 それが日本の特徴で、西洋の実体と日本の「無」をどうバランスをとるのかを考えています。「存在」と「無」の間のバランスという考え方がないだろうか、と。これは例えば、人間関係みたいなことが一番わかりやすく、西洋では初対面の人に自分がどれだけ優秀かがわかるように自己紹介をするけれども、日本ではそうやって人間関係の中で自分の存在を極度に強めてしまうと他人から嫌われますよね。「自分は何もできないんだ」と適当に存在感を消さないとその場にいづらくなる。しかし西洋人にはそういう配慮はあまりないでしょう。

福嶋 日本人はむしろ無、自己消去から入っていく。

佐々木 プレゼントを渡す時も、西洋では、渡したらすぐに「開けて」と言って、「どう？ 素敵でしょう、あなたはこれが好きでしょう」と迫るけど、日本では「つまらないものですが」なんて言う。西洋人からはつまらないものを人にプレゼントするなと怒られてしまいますが、逆に日本で「これは立派なものです」と言って渡したら「この人は何を考えているんだ？」という話になる。そういうふうに、「存在」と「無」の間のバランスをとる文化が日本にはまだ残っている。これを、例えば国際関係のような場で少し応用できないかを考えていたりします。アメリカなんか、ドナルド・トランプみたいな人を選んでしまうでしょう。

福嶋 トランプはある意味で優秀なパフォーマーでしょうが、日本的な「無」の観念はないでしょうね。

佐々木 ありませんよね。とはいえ民主党も、近代的なある種の理念から「あらゆる人種は平等だ」「LGBTも差別してはいけない」と言うけれども、結局、自分たちのWASPの文化は決して捨てるわけではなく、いろんなものを受け入れて融合していくということは考えていない。いろんなものが混在することは認めるけれども、自分が変わることは必ずしも受け入れない。

福嶋 そう考えると、バラク・オバマを大統領に選んだのはえらいですけどね。

佐々木 アメリカの啓蒙主義的な側面がいい意味で機能したのでしょう。私はアメリカの啓蒙主義は表面だけだと思っています。アメリカは調子のいい時はオバマみたいな人を選ぶかもしれないけれ

ど、ちょっと調子が悪くなるとトランプみたいな人を選んでしまう。アメリカにはローマ神話のヤヌスのような2つの顔があって、いきなり非常に野蛮で排他的なところを見せたりするのです。

そうではなく、まったく異質なものの間のバランスをとるというあり方が一番、存在としては安定しているのであって、そういう原理でもって世界観を組めないか。そうすれば、異なった伝統の間での融合や共存も、ガダマーとは違った仕方でも可能になるのではないのでしょうか。

福嶋 「無」というとニヒリズムが想起されますが、そうではなくてむしろ「間」としての「無」から社会像なり文化像なりを考え直していこう、というわけですね。

佐々木 ニヒリズムというのも西洋の考え方です。西洋の思想史の中では、「無」というのは破壊的な概念です。だから、ニヒリストというのは破壊主義者ですよ。例えば、ロシアのナロードニキのなれの果てが爆弾テロでもってアレクサンドル2世を暗殺したとか、ああいうようなものがニヒリストと言われたりする。

福嶋 ドストエフスキーが書いたテーマですね。

佐々木 そうです。そうではない概念が日本にはあったと思っていまして、それを生かしていきたいんです。

福嶋 お聞きしていると、佐々木先生はやはり京都学派の哲学と近いところで考えておられるように見えます。

佐々木 ただ、いわゆる京都学派は逆に日本のほうに重きを置いて西洋を排除するような方向へ舵を切ってしまった。アジアを植民地として支配しようとする西洋を逆に駆逐しよう、というのは当時の西洋人と同じ戦略です。同じ力を逆向きに使っているだけで、西洋の罠にはまってしまったと思います。

米中新冷戦とグローバル化の時代の比較文明学

福嶋 そうなるとやはり多面的なビジョンが必要になってくるという意味で、比較文明学というセクションで佐々木先生が仕事をしているのは必然性があると感じます。

佐々木 比較文明学というのは、東西の文明を比較したり、古代

と現代の文明を比較したりということではなくて、多様な文化を比べながらバランスをとっていく、その位置を見出すための営みだと考えています。

福嶋 例えば、アメリカはアメリカファーストでやっている。中国は中国で権威主義国家なので、表向きは「新しいシルクロード」を謳いつつも、実態としてはめちゃくちゃ抑圧的なことをやっている。だから、今の国際政治の中で協調関係を築いていくのは、非常に難しくなりつつある。そうした時代に即応した形で、思想も組み立て直さなければいけない。かつての米ソの冷戦というのは、アメリカもソ連も大雑把に言えば西洋だし、どちらも新しい国家で建前としては民主主義を目指すということになっていた。ソ連もプロレタリアートを中心とした人民の国家をつくるというようなことを言っていたわけです。

佐々木 しかしソ連も実態は一党独裁で、民主的と言えるようなものではなかったですよ。

福嶋 それはもちろんそうですが、実態は収容所国家だとしても、建前や理念というのはやはり大事だと思うんです。今の中国では権威主義を止める理念は何もないので、習近平は昔の皇帝のような存在に近づいている。現在の新冷戦時代では、アメリカも中国もお互いにもうわかり合えないと思っているでしょう。

人々の交流はかつてなく盛んになり、お互い行き来することは非常に容易になった一方で、イデオロギーの水準では巨大な分断が発生している。と同時に、商業空間の均質化も世界規模で進んでいる。分断と均質化が進む世界では、何をどう比較すればいいかはますます難しい問いになりそうです。

佐々木 ひとつはグローバル資本主義の問題ですよ。中国は社会主義ではなく国家資本主義体制ですから、資本主義文化の画一性が都市にも画一化をもたらし、経済合理性のもとで似たような建物をつくられていくことになる。同じものが人類にとって本当にいいのなら、それはそれで構わないと思います。ただ、そうではない生の生活感覚があるとするならば、やはりそれは問題で、どこかで止めなければいけない。けれども上部イデオロギー、国家のレベルではそれは難しい。国家というのは現代的な生活の根っこから遊離した理論の空中戦の思想によってつくられているものですからね。も

っと草の根の哲学というか、市民間で哲学的に考えられる人たちが交流することによって、まずは民主的な国家からその政府を変えていくのが一番現実的な道ではないかと思います。いくら中国だって中国から出てはいけないということはもうできないわけですから、他所の国へ行けばいろいろな考え方をを持った人たちと思想的な交流を持つこともできる。中国の中でもいろいろな動きがあって、それを武力弾圧するのも限界があるでしょう。そこで少しずつ譲歩を引き出して、徐々に変わらざるを得ない状況をつくっていくのが一番現実的で犠牲が少ない方法ではないでしょうか。

そのためにも、やはりより多くの人が大学で哲学・思想を学ぶようになるのが大事なことだと思います。大学の社会的意味にはいろいろあると思うのですが、やはり自分にとって本当によいこと、本当に利益になることを見極める見識を身に付け、個々の市民がしっかりと考えて生きられる人になる、ということがあると思います。いろいろな力関係で、場合によってはわかかっていても選べないということがあっても、「やむを得ず選んでいるんだ」という認識を持って、チャンスがあれば違う選択に移ることができる。そういう人が一人でも増えていくことが、民主主義の社会が健全な道に進む方法ではないかと思っています。

福嶋 先ほどの話に少し戻ると、自己修正して地平を拡大できるのが教養人の特性であったとすれば、哲学的な教養人が増えることが民主主義や平和の条件になる、と。

佐々木 その通りだと思いますね。

哲学の基礎には天文学への関心がある

福嶋 このあたりで少し柔らかい話をしましょう。佐々木先生は音楽や鉄道、天体観測などいろいろな趣味をお持ちですよ。星を見るのは昔からお好きだったのでしょうか？

佐々木 ええ、今、住んでいる東京ではあまり見えませんが、星空に対する憧れはずっとあります。哲学でも例えば『実践理性批判』の結びで、カントが畏敬の念を抱いて止まないものとして「我が上なる星空と、我が内なる道德律」が掲げられていますが、やは

り西洋哲学を勉強すればするほど、宇宙の秩序と哲学の論理性はつながっている気がします。

もともとギリシャ哲学もそういう発想のもとに行われていたものです。ロゴスというのはコスモスにも行き渡っているもので、人間も言葉を解してロゴスを持っている。人間がロゴスを使って理論を展開すると、それは宇宙そのものの表現にもなるという信念がギリシャ人にはあって、それは自然科学の誕生ともつながっている。そうした意味で、西洋の哲学を学ぶことは、自然科学、とりわけ天文学みたいなものに関心を持つことにもつながっていく。ブラックホールやダークマターといった最新の天文学理論も哲学にとって大事な要素だと思います。宇宙がどのようにロゴスでもって説明できるのか、そしてそのロゴスのある種の限界を徹底的に追求しようとしている。それでも説明できないことが残るわけですが、そういうロゴスを使って我々は哲学をやっていると自覚することで、単に人間だけの狭い理論にならないようにしようという配慮がありますよね。

福嶋 カントは天文学ももちろん勉強していたし、地理学にも詳しくかった。

佐々木 カントは太陽系の起源の研究もしていて、カント＝ラプラスの星雲説というものもありますからね。

福嶋 ガリレオやヨハネス・ケプラーがそうであるように、自然科学だって星を見るところからブレークスルーが起こって、その後の驚異的な発展につながっている。しかし、カント以降の哲学者はだんだん星を見なくなっていくわけですね。それは知性の健康にとってよくない。

カント以前にジョルダノ・ブルーノが「宇宙は無限だ」ということを言ったわけですね。もし宇宙が無限であってみれば中心がどこにもないことになり、それは神学的に問題があるということで抹殺されてしまう。しかし、ブルーノのような天体の観測者がいたからこそ、神の権威を相対化する近代思想も出てくるわけですね。そういうことをもう一度思い出すのは大事かもしれません。

佐々木 はい、天文学への関心は哲学の基本だと私は信じています。

福嶋 佐々木先生はどういった星が好きなのですか。

佐々木 私は天体望遠鏡も持っているのですが、東京で面白いの

は重星を見ることです。重星というのは実はとてもたくさんあって、青い星と黄色っぽい星と、色の違う星が2つ並んでいるととてもきれいなのです。素人向けの望遠鏡でも300倍ぐらいに拡大すると、肉眼や双眼鏡で1つに見える星が2つに分離して見えるのです。有名なところでは夏の星座のはくちょう座のはくちょうの頭になっている二等星が重星です。「嘴」を意味するアルビレオという名前がついています。青と黄色の綺麗なコントラストがあります。春の星座の牛飼い座にも非常に美しい二等星の二重星があって、ラテン語で「一番美しいもの」という意味のプルケリマという名前がついたりします。夏の七夕星のひとつ織り姫星ベガがある琴座には、ダブルダブルと言われる二重星が二つ近くに並んでいる珍しいものもあります。

望遠鏡を使うと、例えば木星の縞模様などもちゃんと見られます。「エウロパ」とか、木星の主要な4つの衛星は双眼鏡でも見ることができますよ。

宇宙人と哲学

福嶋 最近惑星研究も進んでいるようですが、地球以外の新たな居住空間が発見されると、哲学にも影響があるでしょうね。火星に住めるようになった時に、哲学はどうなるのか……。

佐々木 人間の概念も変わるでしょうね。

福嶋 そうした天文学的な問題を哲学に組み込んでいくのは大事だと思います。

佐々木 それも技術の問題ですよ。

福嶋 ハイデガーは宇宙進出を恐れていたのではないのでしょうか。ハイデガーはゲオルゲとの対比でスプートニクの話の唐突に持ち出しています。スプートニクには彼の不安を強くかきたてるものがあったんでしょう。大地も森もない宇宙空間に人工衛星が飛ぶこと存在論的な意味はどういうことなのか。詳しく議論を展開しているわけではないですが、ハイデガーは宇宙進出を彼の哲学にとっての脅威と感じていたと思います。

佐々木 科学技術に100%依存して生きるしかないわけですから

ね。

福嶋 空気も何もかも、技術の力によってつくらなければならない。

佐々木 そうなった時に、人間は人間でいられるかという問題がありますよね。

福嶋 そう思います。先生のおっしゃった「無」の哲学は、まさに宇宙論として考えることもできそうですね。ところで、考えようによっては、宇宙人が「存在の牧人」をしていてもいいということにはなりませんか。

佐々木 宇宙人については私もいろいろ考えたことがあって、世間では宇宙人と地球人はコミュニケーションができると思われているのだろうけど、本当にそうなのか。私たちが想像している宇宙人というのは、私たち自身をモデルにしている、人間の言葉のような記号言語を使っているというイメージでしょう。けれどもまったく違う原理でもって動く生物もいるかもしれない。

福嶋 SFにはよくシリコン製の生物が出てきますね。

佐々木 そういうものと遭遇してしまった時にどうなるのか。人間は自分を、あるいは地球上のことをモデルにしたものを考える癖があって、「人間原理」ということを言う人もいるでしょう。

福嶋 この宇宙は人間用にチューニングされてできている、という考え方ですよ。なかなかすごい発想だと思います。

佐々木 人間原理に拠れば、必ず人間みtainな知的生命体がほかにもいるはずで、そうでなければ我々がこんなふうに理解できる宇宙があるか、ということになるわけですが、人間には、人間にとって都合がいいようなものしか見えないのだと思います。私たちは電磁波にものすごく依存して知覚経験をしています、それ以外にも宇宙には何かが存在しているかもしれない。

福嶋 昔だったらエーテル、最近ではダークマターと言われるようなものですね。

佐々木 我々が検出できない、我々の五感には響いてこないような何かが宇宙にある可能性も否定できないわけです。ダークマターはそうなのかもしれません。とにかくそうすると、例えば私たちは時間や空間という概念で世界を見ますが、時間や空間以外にも何かあるのかもしれないわけです。

福嶋 最近のひも宇宙論なんかは高次元を想定しているみたいですが、素人が直観的に理解できるものではないですね。

佐々木 あれも数学上の概念として、三次元ではなく n 次元の空間という概念を設定しているわけですが、結局は空間と時間の組み合わせでもって宇宙像、世界像を描いているわけです。しかしそれ以外にも、我々には思いつかないような要素があるかもしれない。「自然科学は客観的で正しい」というのは、人間による人間のための人間の世界観でしかない。そういった意味で、我々は縛られていて有限なのだ、というところからものを考えていく姿勢を基本にするべきなのでしょう。

福嶋 カール・レーヴィットはハイデガーをまさにその点で批判していたと記憶しています。古代ギリシャ人はコスモスのロゴスを考えていたけれども、ハイデガーからはそういう宇宙の問題が抜け落ちている、と。ハイデガーの存在は大地とひもづけられているわけですが、それは弱点でもあるのかもしれない。

特急「あさま」の思い出

福嶋 地上に戻りまして、鉄道についてはいかがでしょうか。

佐々木 まず、私の父親が国鉄職員だったのです。

福嶋 先生は長野出身ですよ。

佐々木 そうです。長野市で生まれました。父は農地改革で土地をもらった長野の貧しい農家の三男坊で、自分は土地をもらえないから国鉄に勤めたのです。田舎にいてもたかがしれているし、折しも高度経済成長に入ろうという時代でしたから東京へ転勤を願い出たのです。ちょうどオリンピックにあわせて新幹線が開業しようという時に、志願して新幹線車両の整備をする仕事に就きました。地味な工具ではありましたが当時としては最先端の鉄道技術に触れる仕事をしていたようです。そういう父のもとで育ちましたから、鉄道にはとても思い入れがあります。

福嶋 お気に入りの路線があったりするのでしょうか。

佐々木 長野の出身なので、やはり特急「あさま」に思い入れがありますね。当時の国鉄職員は国鉄全線パスというのを持っていて

本人は乗り放題、家族も7割引で全国を旅することができたのです。それで特急「あさま」で東京から親戚のいる長野によく通いました。特急になる前は急行「信州」といって、今は「あさま」という名前だけ新幹線に残っていますが、特急「あさま」は浅間山のふもと、軽井沢のほうを通って行くので、南には八ヶ岳が見えますし、遠く、美ヶ原も見えました。

福嶋 標高が高いところを走るんですよ。

佐々木 そうです。軽井沢からは小諸へ下っていきあたりはとも見晴らしもよくて、美ヶ原のさらに奥には北アルプスの白い山が見えたりして、あの景色は忘れられません。横川と軽井沢の間には碓氷峠という、国鉄の中では一番急な坂がありました。私の小学生の頃の記憶では、上野から長野まで6時間くらいかかりました。その頃はまだ電化されておらずディーゼルカーの急行「信州」で、その力では登れない勾配でしたから、アプト式といって線路の間に第三軌条というもう1本ギザギザのレールをつくり、アプト式専用の機関車を連結してそこに歯車をかみ合わせながら上っていくのです。そのうちに碓氷峠も新しいトンネルが作られアプト式は廃止されました。新しい線路は勾配が少し緩やかになって、電化されて電車が走るようになったのですが、それでも登れないので、12両編成の特急「あさま」の場合は前に1両、後ろに2両、碓氷峠専用開発された計3両の強力な馬力のある電気機関車が前から引っ張り、後ろから押して、上っていく。

福嶋 それはすごいキャタピラでしょうね。

佐々木 碓氷峠の下にあるのが横川駅で、峠の釜めしという有名な駅弁が売られていました。横川駅では、機関車を付けるために駅に停車時間が十数分あって、その間にお弁当を買って峠を上って食べ終わる頃に軽井沢に着く。軽井沢でも機関車を外すのに10分くらい停車していましたね。今は新幹線になって、碓氷峠そのものが廃線になってしまいました。今では当時の鉄道を物語る遺物が横川の博物館で展示されているのを見ることができます。

日本人と鉄道の哲学

福嶋 日本人はとにかく鉄道が好きで、鉄道が地域のアイデンティティになっていたりもしますよね。東日本大震災でも南三陸鉄道が復興のシンボルになり、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のように鉄道を主題にした作品も多い。日本人からすると当たり前でも、外国人には新鮮に見えるようです。

佐々木 ヨーロッパも一時期はオリエント急行のような長距離特急があったり、庶民向けの鉄道文化も盛んだったりましたが、急速に車社会へ移行したんですよね。日本にも高速道路はたくさんできたけれど、どこへでも車で移動するという社会にはまだなっていない。

福嶋 特に東京のような都市はそうですね。

佐々木 鉄道に乗ることが生活に密着していますよね。普段使っている駅で長距離の特急などを見ると、これに乗れば遠くへ行けるんだという気持ちが湧いてきます。私は新宿駅と池袋駅をよく使いますが、新宿には特急「あずさ」が発着するので、これに乗ると信州へ行けるんだな、とよく想像するんです。

福嶋 そういえば、新海誠監督の新作『天気の子』はまさに「山手線アニメ」なんです。善悪はとにかく、山手線から見えるマスメージ的な風景によって東京を象徴させている。新海さんも長野の人ですよね。

佐々木 佐久のご出身だったと思います。

福嶋 作中でも、主人公が上京してきた時の体験がかなり強く描かれている。やはり東京の都市的なイメージというのは今も山手線の周辺でつくられていると思うんです。

佐々木 私が山手線で一番懐かしいのは上野駅ですね。長野新幹線ができて東京が始発になりましたが、それまで長野へ行くには上野から特急「あさま」に乗ったんです。「うえの～うえの～」というアナウンスがとても懐かしい。上野は終点でしたから、線路が来てそこで終わる頭端式のホームがあって、特急「あさま」や常磐線の特急「ひたち」、東北方面へ行く特急もそこから出ていました。私の幼少の頃は蒸気機関車も停まっていた。今でも、山手線などが

走る高架とはちょっと違う古めかしい雰囲気を残していますね。

福嶋 東京はなかなか輪郭が掴みにくい都市ですが、その東京を丸く区切っているのが山手線です。上野駅はその円環のなかで一種の扉のように感じているように思えますね。

文化とマゾヒズム

福嶋 先生はクラシック音楽もお好きで、ピアノを演奏されると伺いました。

佐々木 そうですね。私の世代が小学生の頃、1960年代前半というのは日本にピアノが普及した時期なんです。ヤマハと河合の二大メーカーが全国の小学校にピアノを売ってまわり、一般家庭にも爆発的にピアノが普及していった。どこかの家を買うとそのご近所もみんな月賦で競って買ったんです。私の近所でも子どものいる家にはほとんどピアノがあり、私の家にもありました。

福嶋 ピアノのある居間は日本の中流家庭の象徴ですが、それは60年代くらいからつくられていったのですね。

佐々木 そうやって子どもたちはピアノを習わされたのですが、長続きしない子がほとんどで、ピアノは埃をかぶって調度品になっていきました。そんな中で、私はピアノが好きになったんです。

福嶋 ピアノのどのあたりが魅力的だったのでしょうか。

佐々木 練習は大変だし、先生は怖いし、あまりいいことばかりではなかったのですが、たまたま私が習っていた小さなピアノ教室で、なぜか一番上手だったんです。音楽の授業も好きでした。当時の学校では最初によくワーグナーのタンホイザーの行進曲みたいな華々しい曲を聞かされたのですが、それを聞いてすごいな、きれいだなと憧れるような子どもだったので、ピアノにも馴染んだのでしょね。中学受験をさせられた時に母親から「もうピアノはやらなくていいから勉強なさい」と言われて一旦止めたのですが、中学へ入ったらショパンの練習曲なんかを弾ける同級生がいて、それに刺激を受けてもう一回始めたんです。とはいえもう誰に習うわけではなく、自分で好きな曲の楽譜を買ってきて独学で納得のいくまで

やるわけです。小学生の時に聞かされた中でもドイツ系の音楽が好きで、ピアノもベートーヴェンが好きでした。高校生の頃は1日4時間ぐらい弾いていました。

福嶋 ピアノへの興味と思想への興味の結びつきはあったのでしょうか。

佐々木 戦後に活躍したフランス文学者で哲学者の森有正はオルガニストでもあって、「思索の源泉としての音楽」というレコードまで出しているんです。学生の頃はそういうものに憧れていました。

福嶋 クラシックの歴史に即すると、19世紀までが作曲家の時代だとしたら、20世紀は演奏家や指揮者の時代だったと思います。演奏行為がまさに「思索」に近くなっていくという一面もあったでしょうね。

佐々木 ただ、現代思想は結構もてはやされましたが、現代音楽と現代美術は日本ではさほどポピュラーではないでしょう。現代音楽は形而上学の極致まで行きすぎて、アーノルト・シェーンベルクといった人たちは現実離れしてしまったところがある。ただ、個々に聴いてみると魅力的な曲は結構あると思います。

福嶋 媒体の変化ということで言うと、今は何でもネットで聴けてしまう。しかし、レコードはもとよりCDを買っていた時のほうが明らかにしっかり聴いていたと思います。今はひとつひとつの音楽を丹念に聴く有り難みというのはなくなってしまっている。

佐々木 ベンヤミンに言わせればレコードはコピーですからアウラがないのかもしれませんが、今思えばありますよね。聴くための儀式がありますから。

福嶋 おっしゃるとおりですね。確かに、レコードは宗教的な覚悟を決めなければいけませんからね。1回かけてしまうとそれを聴かざるを得ない。

佐々木 途中でやめられないし、途中から始めようとするレコードが傷んでしまいますから。

福嶋 文化には一種の苦しみというか、マゾヒズム性が必要です。今はその要素が薄れていて、我慢しなくていいようになってきている。映画だって座席に2時間縛り付けられているということが大きいわけです。途中で「もうつまらないから出たいな」と思っても我慢して観ていると、何か発見があったりする。

佐々木 ハリウッド映画なんかは、90分以上になるとお客さんが我慢してくれないからその尺に収めていると言いますよね。

福嶋 もちろんその制約の中でも面白いものをつくっている人はいると思いますが、やはり縛り付けられるという体験がないと、なかなか文化や芸術には帰依しなくなるでしょうね。

佐々木 私が学生の頃に観て衝撃を受け、以来何度も観ている『2001年宇宙の旅』は途中で休憩が入るくらいでしたから。『アラビアのロレンス』も途中で休憩が入りましたね。ああいう休憩の入った映画が懐かしい。最近観た、『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』というニューヨークの市立図書館を扱った映画も、途中で休憩も入るし、すごくよかったですよ。

福嶋 そうですね。退屈を愛せるかどうかは、文化や芸術を楽しむ上で決定的に重要だと思います。

佐々木 学問というのはそういうものだと思います。今は刺激が強いですし、次々と新しく変わっていくでしょう。我慢しない人のための文化になっている。

福嶋 同感です。だいたい外国語を読むことだって我慢の連続ですから。

佐々木 そうですよ。若い学生にはそういう根気を持ってもらいたいですね。

星を見、音楽を聴き、鉄道に乗る哲学

福嶋 哲学にからめると、音楽は文字通り形而上学的なところがあって、フィジカルな妨害を受けずに秩序立った世界をつくることができる。哲学者が音楽に興味を持つのは当然でしょう。と言いつつ、しかしハイデガーは音楽について語らない人ですよ。

佐々木 そうですね。ハイデガーは貧しかったこともあって、あまりそういう趣味はなかった。

福嶋 ゴッホの描いた農民の靴については語るわけですが、音楽は彼の哲学から除外されている。ハイデガーの論敵のアドルノとはそこが対照的です。

佐々木 ただ、立教に勤めてから2度、1年ずつドイツで生活する

機会があったのですが、向こうではクラシックの音楽は日常に馴染んでいる。哲学・思想と芸術というのは、やはりいろんな形でつながっていて、そういう文化とセットでひとつの世界観があるんだと思います。

福嶋 なるほど。ちなみに、20世紀後半のピアニストはまさに「解釈者」としてすごいと思うんです。ピアノという合理化された楽器を使ってロマン派のべったりした感じをそぎ落とし、非常に計算的にやっていく。グレン・グールドはその解釈学の一つのピークでしょう。どんな音楽を聴くかは当然、思想にも直結してくる問題です。佐々木先生は最近はおペラもよく聴いておられるそうですね。

佐々木 オペラを聴くようになったのはここ10、20年ぐらいです。以前は台本としてはくだらないのが多いから、あまり聴けなかったのですが。

福嶋 確かに文学的には読むに耐えないものが多いと思います。

佐々木 だから音楽の趣味からオペラは排除していたのですが、1993～4年にテュービンゲン大学に1年ほどいた時にオペラと出会い直す機会があったんです。向こうではガダマーの弟子のギュンター・フィガールという人にお世話になったのですが、彼がシュトゥットガルトのオペラ劇場でやっていたプッチーニの『ラ・ボエーム』に連れて行ってきて、実際に聞いてみてやはりオペラもいいなと思ったんですね。

福嶋 シェーンベルクは意外にプッチーニが好きだったとか……。

佐々木 そうなんですか。帰国後も、私は京王線の沿線に住んでいるので、初台の新国立劇場で結構安い料金でオペラを観られる会員になったらはまったんです。プッチーニもヴェルディもとてもいいし、ワーグナーには必ず行っています。

福嶋 ワーグナーと言えば、必ずニーチェが連想される。逆に20世紀の哲学にはそういう対応関係がありませんね。星も見なければ音楽も聴かない、という哲学者の典型がハイデガーかもしれません。もちろんハイデガーは恐ろしく偉大ですが、それ以前の雑多さを取り戻す必要はあると思います。

佐々木 だから、学生諸君も勉強だけでなく、いろいろなことにチャレンジしてほしいんです。もちろん勉強は大事ですが、いろいろな幅を持っているとその勉強がより生きます。そういうことは一貫

して伝えてきたつもりです。

福嶋 ありがとうございます。最後になりますが、比較文明学専攻は1998年に創設され、本紀要も今号でちょうど20号という区切りを迎えます。創設から現在までを見てこられた佐々木先生から、比較文明学専攻と文芸・思想専修にメッセージをいただけますか。

佐々木 比較文明学専攻と文芸・思想専修の創設当時、私は一番若い世代としてその創設にかかわりました。そこで知ることができた先輩たちの思いというのを自分なりに咀嚼して、これまでやってきました。何事も経緯というのがありますし、ガダマーの解釈学ではありませんが、やはり伝統というのがあります。比較文明学専攻と文芸・思想専修のコアの精神を伝えていただきながら、新しい思想、新しい文化、そして新しい学生を迎えていってほしいと思います。

(2019年9月6日 立教大学佐々木一也研究室にて)

[注]

- 1 Hans-Georg Gadamerの日本語表記は、本文では「ガダマー」を用いるが、書籍名など固有の表記がある場合にはそのまま「ガーダマー」としている。